



# かけはし

## 教授就任挨拶

診断病理学講座

駄 阿 勉



平成29年4月1日付けで、診断病理学講座教授に就任いたしました駄阿 勉（だあ つとむ）でございます。私は昭和62年3月、大分医科大学医学部（現大分大学医学部）を卒業しまして、2年間の内科研修ののち、今日まで病理診断業務に携わって参りました。

病理診断と申しますと馴染みのない方も多くいらっしゃると思いますので、まず、病理診断につきまして、簡単に紹介させていただきます。

私たちの身体は、およそ60兆個の細胞から成り立っていると云われており、適切に分化した細胞が集まって、脳、肺、肝臓、脾臓や心臓、骨などの、組織や臓器・器官を形成しています。私たちが病気にかかると多くの場合、この細胞や組織の形に異常が生じます。病理診断は、顕微鏡で、細胞や組織に生じた異常を観察し、病気の診断をする業務となります。

特に重要視されるのは腫瘍性疾患の診断です。私たちの二人に一人が癌（悪性腫瘍）に罹患するといわれている今日です。細胞が癌化しますと、その形が著しく変化し、癌特有の形態を示してまいります。胃カメラや大腸ファイバースコープで、それと判る場合ももちろん多くありますが、癌か否か、悪性か良性かの最終判定は、癌細胞を直接観察する病理診断に委ねられるのが一般的です。従いまして、私たち病理医も他科の医師と同様、大きな責任を担っていると考えています。診察室や病棟で皆様にお会いする機会はほとんどありませんが、私たちも大分大学医学部附属病院の一員として、積極的に診療に参画しています。

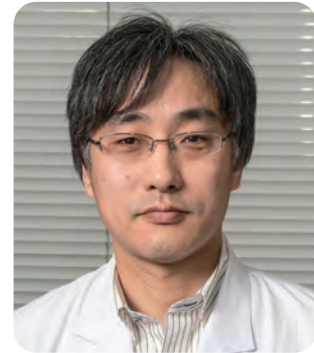
診療以外の任務として、大学の講座には後進の育成、研究がございます。診断病理学講座では、医学部の学生や新人医師の教育や研究に、皆様の病理組織検体が欠かせません。講座では、検査が終わった後も皆様の病理検体を保管しておりますが、その中から教育、研究に必要なものを使用させていただきたい場合がございます。皆様のご理解、ご協力をお願いいたします。



# 教授就任挨拶

皮膚科学講座

波多野 豊



前任者の退職に伴い、昨年4月1日付けで、皮膚科診療科長を引き継いでおりましたが、本年4月1日付けで、皮膚科学講座の准教授から教授に昇任しました。引き続き宜しくお願い申し上げます。

本院の皮膚科は、大分県の皮膚科領域における診療と人材育成の中心としての使命を果たせるよう、他診療科や地域の医療機関と連携しながら、一人一人の患者さんと真摯に粘り強く向き合って参りたいと考えております。

免疫・アレルギー関連の重症或いは難治性皮膚疾患（薬疹、アトピー性皮膚炎などの湿疹・皮膚炎群、乾癬、自己免疫性水疱症、円形脱毛症など）、皮膚がん、重症感染症、その他、診断の困難な疾患など、幅広い領域に対応したいと考えております。

皮膚科領域においても、近年の医学の進歩に伴い診療の高度化が急速に進みつつあります。悪性黒色腫における免疫チェックポイント阻害剤、悪性黒色腫などの皮膚がんや乾癬に対する分子標的薬などの登場が象徴的です。このような流れは、他の皮膚疾患にも及んで参ります。従来からの治療と新しい治療のメリットとデメリットを十分に考慮し、一人一人に合った治療を、患者さんと一緒に選択していきたいと考えております。

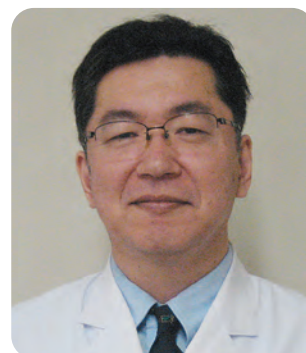
大学病院である本院には、学生教育、人材の育成、そして新しい知見を見出し医療の発展に貢献していくことも求められております。皮膚科でも積極的に取り組んで参りたいと考えておりますので、皆様方のご理解とご協力を賜りたく存じます。

最後になりましたが、皮膚疾患の多くは、患者さんご自身の目にも見えます。従って、良いときも悪いときも患者さんとともに分かち合えることが大きな特徴です。一方で、患者さんの目に見えるということは、皮膚疾患の治療では、患者さんと医師をはじめとした医療者の協同作業と言える側面が強いことも意味します。患者さんと喜びを分かち合える瞬間が少しでも多くなるよう、皮膚科教室員一同、日々の診療に取り組んで参る所存ですので、何卒宜しくお願い申し上げます。

## 教授就任挨拶

医療安全管理医学講座

平 松 和 史



平成29年4月1日付けで医療安全管理医学講座教授を拝命しました。医療安全管理医学講座は医療安全管理や感染制御を担当する講座で、附属病院では医療安全管理部と感染制御部の部長を兼任しています。

医療安全管理部や感染制御部という部署は、皆様にとって、なじみの薄い名前だと思います。これらの部署は、直接、患者さんを診察したり、治療したりする診療科ではありません。医療安全管理部は、病院のなかで起こっている様々なエラーを見出し、その原因を究明することで、同様の事象が起らないような仕組みを構築していくことを目的に設置されています。最近増加していることとして、転倒があります。入院生活は、自宅などと環境が大きく異なるため入院中の患者さんが病院内で転倒することがあります。ご高齢の患者さんでは転倒によって骨折し、入院の原因となった疾患以外に対しても治療が必要となる場合があります。こうしたことを防止していくために患者さんの状態を把握し、転倒が起らないような対策を行うとともに、入院患者さんへはリーフレットを配布し、注意喚起を行っています。また感染制御部は病院の中でノロウイルス感染症などの流行性疾患や薬剤耐性菌が拡散することのないように、いろいろな対策を立案し、推進していく部署です。例えば、冬季にはインフルエンザが流行します。入院患者さんがインフルエンザに罹患すると予定していた検査や手術が延期となり、患者さんへ不利益が生じてしまいます。このようなインフルエンザなどが院内で流行しないよう様々な対策を講じています。医療安全管理部や感染制御部は、本来の診療や看護が適切且つ円滑に行われ、よりよい医療を提供する上で重要な役割を担っています。

こうした活動は病院に勤務する医師や看護師などの職員の活動だけでなく、患者の皆さんやお見舞いの方々など病院に出入りするすべての人の協力が重要です。より質の高い医療の推進のために、皆様方のご協力をお願いいたします。



## 大分大学医学部附属病院 海外渡航(予防接種) 外来のご紹介 — 平成29年9月開設予定 —

当外来は、「海外でのリスクを最小限に」をスローガンに、渡航先に合わせたワクチン接種やさまざまな情報提供を行います。ビジネスのグローバル化や海外留学などで、海外への渡航者が増える一方、日本人は海外での病気に対する予防意識が低いため、感染症の罹患者も増えています。当外来ではそうした方を減らすための活動に力を入れていきます。

衛生環境の整った日本や欧米とは異なり、アジア・中近東・中南米・アフリカなどでは、日本では殆どみられなくなった感染症が依然として流行し、公衆衛生上の問題となっています。現在の日本人は、このような疾患に対して免疫力、抵抗力が極端に低下しているために、感染症に罹患する可能性が高くなっています。

すべての感染症にワクチンが存在するわけではありませんが、予防可能な感染症に対しては、罹患を避けるために渡航前のワクチン接種をお勧めします。

各種検査・ワクチン接種・診断書作成などの費用は、医療保険の適用外で自費診療となります。ワクチンの接種料は、その種類によりますが、一種類あたり1,600円~12,000円程度です。なお、当外来で接種可能なワクチンは下記の通りです。

- ・ A型肝炎ワクチン    ・ B型肝炎ワクチン    ・ 破傷風トキソイド    ・ ジフテリア破傷風トキソイド
- ・ 日本脳炎ワクチン    ・ 四種混合ワクチン    ・ 麻疹ワクチン    ・ 風疹ワクチン
- ・ MRワクチン    ・ 水痘ワクチン    ・ おたふく風邪ワクチン    ・ 狂犬病ワクチン
- ・ 髄膜炎菌ワクチン

※また、マラリア流行地域へ渡航する方には予防内服薬(メファキン、マラロン)の処方や、高山病予防のための処方も可能です。

### 担当医 西園 晃

(大分大学微生物学教授、日本渡航医学会認定医療職、インフェクションコントロールドクター)

※完全予約制です。ご予約方法は決定次第、病院ホームページでお知らせします。

(文責 医事課)

## 精神科デイケア

精神科リハビリテーションのひとつとして、平成29年5月15日に精神科デイケアセンターを精神科病棟近くの西病棟2階に開設しました。週5日間、平日の午前9時から午後4時まで1時間の昼食休憩をはさんで活動します。精神科デイケアは、個人的な精神療法と異なり、主に集団での活動を通じて社会復帰や職場復帰を目指します。

当科デイケアは、復職を目的とした「リワーク(Re-work)プログラム」が特徴で、その方の職種に合わせたプログラムを行います。休職をした方が精神療法や薬物療法によって精神症状が改善しても、職場に戻ると症状が再発してしまい、再休職に至るケースがしばしばあります。これは、精神症状が改善した状態と、実際に働くことができる状態つまり認知機能や作業能力が回復した状態には大きなギャップがあるからです。このギャップを埋めるのが、「リワーク」です。認知機能や作業能力を高めるプログラムは患者さんそれぞれの復職先の仕事内容に合わせて考案し、実際には医師、看護師、作業療法士、臨床心理士、精神保健福祉士、芸術療法士が行います。他の病院受診中の方の通所も可能です。

精神科のホームページ(<http://www.med.oita-u.ac.jp/psy/>)からパンフレットもダウンロードできますので、是非ご覧ください。

(文責 精神科 坂井 亜果里)



## 最新の診断と治療

## 難治性ぜんそくの新しい治療 ～気管支サーモプラスティ～

ぜんそくは空気の通り道（気道）に炎症がおき、さまざまな刺激に反応して、発作的に気道が狭くなる病気です。咳や痰、ゼーゼー、ヒューヒューという息苦しさが、夜間や早朝に出やすいのが特徴です。治療としては吸入ステロイドや気管支拡張薬が主体ですが、そのような治療をしても症状がとれない難治性ぜんそくの方がいます。

気管支サーモプラスティは、ぜんそくの薬をきちんと使っていても発作がでてしまう18歳以上の患者さんに対して行う新しい治療です。内視鏡を使って、気管支の筋肉を温めることで、気管支を狭くならにくくします。入院して行う治療で、1回目は右肺の下の気管支、2回目は左肺の下の気管支、3回目は両肺の上の気管支、というように気管支全体を3回に分けて治療を行います。

実際の手順としては、のどに局所麻酔をかけ、少し眠たくなる薬を点滴して治療中の不快感を和らげます。その後内視鏡が口から気管支にはいり、そこからカテーテルを出して気管支の内側を温めます。内視鏡やカテーテルをうごかして、たくさんある気管支をひとつずつ、温めていきます。予定の気管支を温めたら1回の治療は終了です。1回の治療に40～60分程度かかります。治療と治療のあいだは、それぞれ3週間以上あけて行います。治療後にぜんそくの発作や肺炎などがおきることがあります。また気管支サーモプラスティ後もぜんそくの薬がいらなくなるわけではなく、症状に応じて薬を継続します。

平成27年4月に日本で保険収載され、大分大学では平成28年から治療を行っています。この治療をした患者さんでは、生活の質（QOL）の改善や、ぜんそく発作の頻度、救急外来受診の回数が減ったという報告がありますが、ぜんそくの状態や他の病気のためにこの治療が対象とならないこともあります。治療の対象となるかどうか、医療費などについては主治医または呼吸器内科にご相談ください。

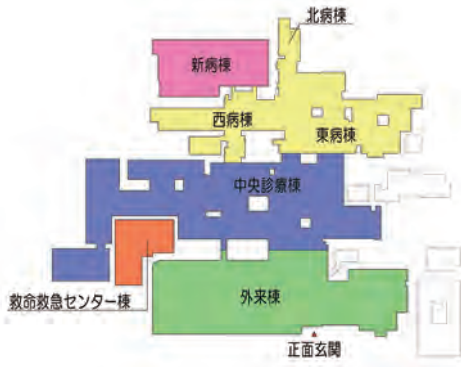


（文責 呼吸器内科 宇佐川 佑子）

# シリーズ 病院再整備

## 病棟の最終移転

西病棟改修工事が終了し、平成28年11月に先行運用しました西病棟7階を除く、西病棟2階から6階の病棟移転を平成29年5月1日・3日の両日に終え、運用を開始しました。移転後の病棟の様子をご紹介します。併せて、西病棟移転後の病棟配置についてもご紹介します。



《精神科デイケアセンター》



精神疾患による休職等からの職場復帰を目的とするプログラムを施す「精神科デイケアセンター」を西病棟2階に開設しました。

《食 堂》



西病棟3階から7階の各階に「食堂」を設置しました。お気軽にご利用ください。

《家族待機室3》



西病棟3階に「家族待機室3」を設置し、5月8日から運用を開始しました。手術時の待合せなどにご利用ください。

《新病棟 準個室》



新病棟4階・6階・7階に「準個室」を設置しました。

### 【平成29年5月の病棟配置】

	東 病 棟	西 病 棟	新 病 棟	北病棟
7 階	血液内科 腫瘍内科	消化器内科 消化器外科	消化器外科	
6 階	内分泌・糖尿病内科 膠原病内科 腎臓内科 総合内科・総合診療科	神経内科 乳腺外科	呼吸器内科 呼吸器外科	
5 階	腎臓外科・泌尿器科 麻酔科	皮膚科 形成外科	耳鼻咽喉科・頭頸部外科 歯科口腔外科	
4 階	小児科 小児外科	産科婦人科	産科婦人科 NICU 新生児治療室	
3 階	血液浄化センター 家族待機室1・2 ICU家族待機室	循環器内科 CCU 家族待機室3	循環器内科 心臓血管外科	
2 階	脳神経外科 眼科	放射線科 腫瘍センター 緩和ケア病床	整形外科 リハビリテーション部	

(文責 病院再整備推進室)

## 大分大学医学部附属病院

〒879-5593 由布市挾間町医大ヶ丘1丁目1番地 TEL 097-549-4411 (代)

大分大学医学部附属病院ホームページ <http://www.med.oita-u.ac.jp/hospital/index.html>

これまでの「かけはし」は、医学部附属病院ホームページからご覧いただけます。

